王朝文学文化研究会　土曜部会　平成二三年　七月二日
通信教育課程　卒業生　美濃島千鶴

『古今集』巻第一　春歌上　四七番歌
（テキスト　三二頁）
※校異と他出は『古今和歌集全評釈』による

《四七番歌》

【本文】

素性法師

ちるとみてあるべきものを
梅の花　うたてにほひの袖にとまれる

【通釈】

花が散るな、と思って見ていればそれでよかったのに、なまじ触れたばかりに困ったことには、梅の香りが袖に残ってしまっている。

【他出文献】

◆新撰万葉　三。　◆寛平御時后宮歌合　三。　◆素性集三。

◆古今六帖　第六「梅」四一四三。

【校異】

◆素性法師―そせい（関・俗・六・永・前・天・伏・経・高）

―ナシ（善）

【語釈】

◆素性法師＝六番歌参照。

◆ちるとみてあるべきものを

全集―梅が散るなと思っていればよいのに。第二句の「ある」は存在の意味ではなく、陳述の機能だけをもつ助動詞的なもの。

松田新釈―梅の花が散るなあと、通り一ぺんに見ておればよいのに、そうしないで、なまじっか折ったりするからの意。

「ものを」は、詠嘆の意を含んだ逆説の接続助詞。

片桐全評釈―「（梅の花は）散るものだと思って、そのままあるべきなのだが」。「あるべきものを」は「我をのみ思ふと言はばあるべきを～」（俳諧歌・一〇四一）の「あるべきを」と同じ。そのままいられるのだけれども。あきらめてじっとしていられるのだけれども。

◆梅の花

片桐全評釈―主語というより、対象語と見た方がよくわかる。

松田新釈―上の句を受け、また下の句にかかる。

◆うたて

教長―爰梅ノ花ノ香ハ、ケタカク、メデタキヲ、ナドカク、アヤシノソデニウツルラムト、ハヂシメ、モテアソベルナリ。

顕註密勘―うたゝすぐるなどかくは、あまりにすぐるといふ心也。…心こそうたてにくけれ、とよめるも、あまりにくしと伝心也。　首書―あまりに、という心也。

余材―よのつねならぬ香の心なるべし。　打聽―あやにくも

遠鏡―ヒョンナ事ヤ　正義―思いの外なる匂ひ

金子評釈―厄介な。　至文―あいにく

窪田―「うたて」は意味の広い副詞で、ここは「つれなく」といふに近い。

全集―いやなことに。嘆かわしくも。「うたて」は形容詞「うたてし」（いとわしい、嘆かわしい、の意）の語幹が「うたてく」の意に用いられたものとも考えられる。類例→「あやな」一二三・「はや」二〇九。

新大系―格別に、異様にの意。新撰万葉集では「別様」と書く。「別様」―［名・形動］ようすややり方が他と異なっていること。また、そのさま。『大辞泉』

※天理図書館藏『古今和歌集聞書』通称『古今集延五記』（延徳四＝一四九二年）に「うたてにほひの」

轉（ウタテ）について、「哥ノ心ハ只チル斗ノ名殘ニテ／有ヘキヲ梅ノ香ノ深キニ依テ／ヤヽモスレハ執心相殘ル間中々／匂ノウタテシキト也。是モ梅ヲ賞シタル心也。」

〔巻第一　２８〕

松田新釈―不愉快なこと。あいにく。「とまれる」にかかる。嫌悪の情を表わす。

片桐全評釈―「心外だ」「気にくわない」という意だが、間投詞的に挿入されて話者の率直な気持ちを表す場合が多い。

※この語は上代から今昔・徒然草などに至るまで長い間にわたり広く用いられている。古今集の用法は以下のようである。

◇「心こそうたて憎けれ染めざらばうつろふ事も惜しからましや」（恋五・七九六）

◇「あはれてふ言こそうたて世の中を思ひ離れぬほだしなりけれ」（雑下・九三九）

◇「花と見て折らむとすればをみなへしうたた（イうたて）あるさまの名にこそありけれ（俳諧・一〇一九）

万葉・古今・平安時代の物語・日記などの用例からその語義を導き出すと、平安時代においては、あんまりだ、いきすぎだ、なまじっか余計なこと、あるいは図にのりすぎている、調子にのりすぎている、調子にのりすぎている、といった気持ちで用いられているといえるようである。この歌の場合も、とまらなくてよいのに、余計なことに袖にとまっている、という意に解される。

◆にほひ

片桐全評釈―『万葉集』では丹を基盤にした色彩の美しさを言うが、ここは梅の香り。「匂い」である。

◆袖にとまれる

松田新釈―袖にとどまっていることよ。「る」は完了の助動詞の連体形、下に「ことよ」の省略された形。梅の香が、袖にとどまって、散ることを忘れようとしている自分に、いつまでも思い出させるとは、ひどいことだの意。

【鑑賞】

「うたて」と強く言っているところに、当時の梅の花に対する常識的感じ方から言えば意表外に出ている面白味がある。

「花が散るのはその本性であるゆえに仕方がない」という道理をもってあきらめているのであるが、『片桐全評釈』は「このような理知的把握がそのまま終わるのではなくて、梅の花！

という直情的な呼びかけによって転換し、うたてと自分の内面を吐露し、香りがそのまま残っているのが、かえって私をあきらめ切れなくさせるよ……と情の世界に立ち戻り、香りに抽象された花を袖に凝縮して、美の世界を形づくっているのである。理知が勝ち過ぎた歌、気転がきいた歌という批評だけでは語り切れない、素性法師の真骨頂が示されている歌である。」

と評している。一般の心理の裏をいったものである。

また、『松田新釈』は、四六番歌は、袖に梅の香をとどめて、散る梅の花を惜しむ情を素直に詠んだのに対し、同じ哀惜の情を逆に表現し、梅の香があるために、かえって忘れられぬつらさを味わうという。言い方が逆でも、散る梅に対する哀惜の情は共に等しい。一ひねりした歌であるが、かえって、散る梅花を惜しむ心情が強調されている。

花をはかないものとして、過度な感傷を自らに禁じようとしながらも、袖の移り香によって静観に困難を感じている心。いわば理知と感情との間で、無常と美との間で、葛藤する心情を詠んでいるのであり、これは古今集に繰り返し現われ展開されてゆく、最も重要な主題である。「寛平御時きさい宮の歌合」は光孝天皇の后班子女王の催した歌合。実質的な主催者は宇多天皇であったろうと言う。成立は寛平五年(893)以前。

【配列】

家にありける梅の花の散りけるをよめる　つらゆき

45暮ると明くと目かれぬものを梅の花いつの人まに移ろひぬらむ

46梅が香を袖にうつしてとどめては春はすぐともかたみならまし

47ちるとみてあるべきものを梅の花うたてにほひの袖にとまれる

48散りぬとも香をだにのこせ梅の花恋しきときの思ひいでにせむ

45の貫之の歌は、ずっと注意していたにもかかわらず、気付かないうちにうつろひはじめたうめの花を詠じたもので、散る梅の歌群の冒頭をかざるにふさわしいものであると考える。以下の三首はいずれも梅の花が散った後の残り香を題材とする。46は梅の花が散ってしまっても香が残っていれば、それが散ってしまった梅の花のかたみになるとし、47は香が残っていては梅の花をいつまでも思い出させて迷惑だとし、48は素直に残っている香で梅の花をしのぼうという。つまり三首は、梅の残り香に対し、①好意を示す二首と嫌悪を示す歌一首が、好―嫌―好という順に配列されていることになるか、②あるいはこの三首は前の二首の対立と三首目で判定をつけようという形の配列なのかと考えられる。

最後の48は46と発想が類似しているが、素直に自分の思いを表現して、一首全体が落ち着いた印象を示していて。梅の

歌群の最後を飾るにふさわしい歌になっていると考える。

【参考文献】

『古今和歌集』　小沢正夫　日本古典文学全集　小学館　昭和四六年四月一〇日

『古今和歌集』小沢正夫　松田成穂　新編日本古典文学全集　小学館　平成六年一一月二〇日

『古今和歌集全評釈　上』片桐洋一　講談社　平成一〇年二月一〇日

『新釈古今和歌集　上巻』　松田武夫　風間書房　昭和四三年三月一五日

『古今歌風の成立』平沢竜介　笠間書院　平成一一年一月一一日

『古今和歌集評釈』窪田空穂　東京堂　昭和一〇年一二月一〇日

『古今和歌集全評釈（上）』　竹岡正夫　右文書院　昭和五一年一一月一〇日

『和歌文学大系』（『素性集』）　明治書院　平成一〇年一〇月